

ぬったり
 沼垂町・新潟町のせがい造りを持った町家の室空間構成と使われ方の研究

—阿賀野川流域の他の町家とのせがい造り形状の比較—

A STUDY OF SPATIAL STRUCTURES AND SPACE MANAGEMENT IN “SEGAI” STYLE
 “MACHIYA” HOUSES IN THE TOWNS OF NUTTARI AND NIIGATA

A comparison between the “Segai” style “Machiya” houses of Niigata and Nuttari
 and those located around the Agano-river basin

小林 勉*, 西村伸也**, 阿部 元***

Tsutomu KOBAYASHI, Shin-ya NISHIMURA and Gen ABE

Houses using the architectural method called “segai-style”, which is characterized by its use of cantilevers as the ceiling beams to hold the roof, are often seen in the towns around Niigata City. It is considered that the different structure of those “segai-style” traditional “machiya” houses are giving a different impression to the scenery in Nuttari district (formerly Nuttari Town), and the scenery in Niigata Island (formerly Niigata Town).

We will also make it clear that there is systematic transformation in the position of “segai” beams and rafters in those “segai-style” machiya houses by comparing “machiya” houses in the towns of Tsugawa, Suibara, and Kameda, which are all located in the Agano-river basin.

keywords: nuttari, niigata, machiya, segai-style, agano-river basin

沼垂, 新潟, 町家, せがい造り, 阿賀野川流域

1. 研究の背景と目的

本研究は、沼垂町を中心に新潟町との景観の差を、町家とその構法に焦点をあてて分析するものである。この研究を通して、今後新潟市の中心市街地で風土を生かしたまちづくりを行う上

での、基礎的な資料を得ることを目的としている。^{注1)}
 新潟市近郊には、片持ち梁を出し屋根を支えるせがい(船椽)造りの町家や農家があり、特有な景観をつくり出している。特に新潟



fig.1 沼垂町・新潟町のファサード

* 三善建築設計事務所 修士(工学)
 ** 新潟大学工学部建設学科 教授・工博
 *** 新潟大学大学院

Miyoshi Architecture Interior Office, M. Eng.
 Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.
 Graduate Student, Dept. of Science and Technology, Niigata Univ.

市の中心市街地の一部である沼垂町と新潟町の町家には、同じせがい造りの町家が見られるが、その景観は大きく異なっている。沼垂町は骨太で、新潟町は繊細であると表現されていることが多い (fig. 1)。

町家の空間構成については、「京の町家」(島村昇他¹⁾)²⁾で、室空間といった空間の使われ方のオモテ、カド、ローチといった外部空間の使われ方についても詳細に説明している。

新潟県内の町家については、西村³⁾が上越高田、白根、栃尾における町家の研究、特に江戸間の隙間を使用する空間として、「ダシアイ」、「クイアワセ」、「ヒアワイ」⁴⁾に焦点をあてて分析している。

更に、土間の空間構成と使われ方や路地を持った町家、中庭について、また階段の向きと上階の配置についての研究⁵⁾がある。

一方、北陸地方を中心とした、住宅、農家といった研究では、玉置⁶⁾らは、その構法に焦点をあてて研究を重ねている。

本研究では、特にせがい造りに焦点をあてて、その違いとそれぞれの地区におけるの景観の差が空間構成と関連していることを明らかにし、その違いを捉えようとするものである。

2. 調査内容及び調査対象 (fig. 2, 3, 4, 5)

調査期間は、1998年10月～2000年1月までの1年3ヶ月である (fig. 3, 4, 5)。

調査対象地として、沼垂町、新潟町の中でも大火をまぬがれた、明治初期から昭和20年代までの比較的古い町家が多く残っている地域を選定した。実測調査として、屋根の流れ方、庇の有無、軒高、間口、せがい梁及び柱割・平面構成の寸法取り等のチェックを行った。ヒアリング調査では、家族構成、各室の住まい方、部屋の呼称、庭の使い方、いろり、穴蔵の有無等を聞いた。さらに、阿賀野川流域の亀田町、水原町、津川町のせがい造りの軒高、間口、梁やたる木寸法を比較して調査した。

3. 沼垂町と新潟町のファサードの比較

3-1) 屋根形状による分布

沼垂町に現存している町家全体を見ると、58軒中、平入り屋根が35軒を占める。また、せがい造りを見てみると、平入り屋根、寄棟屋根の54軒中43軒がせがい造りである。沼垂町は、平入り屋根とせがい造りの組合せが33軒と多いことが特徴である。

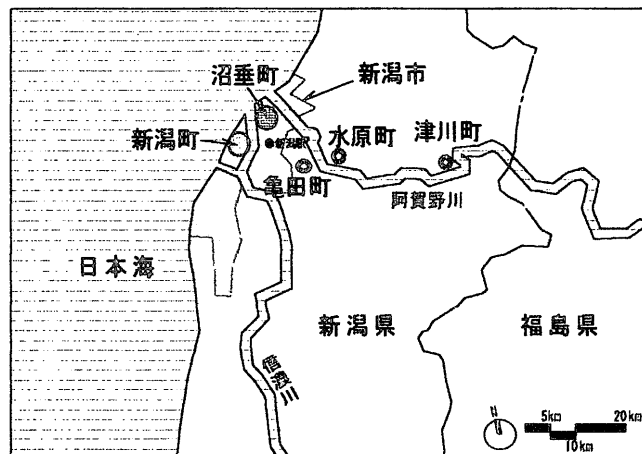


fig. 2 調査地の位置

| | 調査期間 | 調査地域 | 調査内容 |
|------|-----------------------|--|--|
| 1次調査 | 1998年10月 ～1998年11月 | 沼垂町 58軒 新潟町 53軒 | 比較的古い建物の写真撮影 屋根形状 庇の有無 軒先のせがい造りの有無 |
| 2次調査 | 1998年11月 ～1999年1月 | 本町通(沼垂) 12軒 古町通(沼垂) 3軒 西方原(沼垂) 8軒 本町通(新潟) 9軒 上大川前通(新潟) 12軒 | 外部データの実測調査 せがい造りディテールの実測 軒高・間口等の実測 写真撮影 |
| 3次調査 | 1999年6月 ～1999年11月 | 本町通(沼垂) 8軒 上大川前通(新潟) 3軒 本町通(新潟) 3軒 | 外部・内部平面の実測調査 ヒアリング調査 (住まい方、家族構成など) |
| 4次調査 | 1999年11月 ～2000年1月 | 亀田町 8軒 水原町 9軒 津川町 11軒 | 外部データの実測調査 (軒高、屋根形状、間口寸法、庇の有無など) 追加ヒアリング調査 |

fig. 3 調査住戸の概要

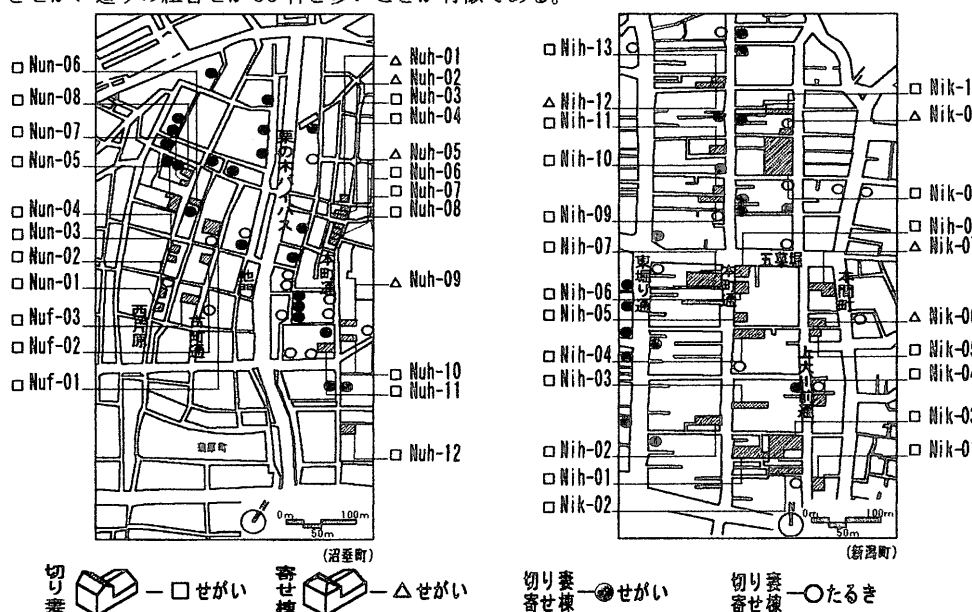


fig. 4 調査対象地 (調査対象住戸 沼垂町: Nun, Nuf, Nuh 新潟町: Nih, Nik)

| | 符号 | 通り名 | 年代 | |
|-----|--------|--------|---------|-------|
| 沼垂町 | Nuh-01 | 本町 | 昭和2年頃 | |
| | Nuh-02 | " | 昭和12年頃 | |
| | Nuh-03 | " | 昭和2～3年頃 | |
| | Nuh-04 | " | 昭和2～3年頃 | |
| | Nuh-09 | " | 昭和7～8年頃 | |
| | Nuh-10 | " | 昭和2年頃 | |
| | Nuh-11 | " | 昭和2年 | |
| | Nuh-12 | " | 明治初期 | |
| | 新潟町 | Nih-03 | 東堀通 | 明治13年 |
| | | Nih-04 | " | 明治初期 |
| | | Nih-12 | " | 昭和17年 |
| | | Nik-03 | 上大川前通 | 明治初期 |
| | Nik-06 | " | 大正13年 | |
| | Nik-10 | " | 明治19年 | |

fig. 5 内部調査住宅竣工年代

一方、新潟町を見ると、沼垂町と同様に53軒中平入り屋根が41軒を占める。その平入り屋根、寄棟屋根51軒のうちせがい造りは39軒ある。両地域ともせがい造りの占める割合はほぼ同じ70%程である。ところが、たる木造り（せがい梁を出さず、たる木のみ屋根納まりをこう呼ぶ）を見てみると、沼垂町にある平入りのたる木造りは新潟町より50%少ない。

せがい造りは、単に構造的に片持梁で梁を出して屋根を支えるのではなく、梁やたる木の木組の美しさ、町家の格式を示すものである。また、両地域で通りごとに、せがい造りの町家を見てみるとその割合も大きく違っている。

3-2) 通り別屋根形状とせがい造りの分布

通り別にせがい造りの町家を比較すると、屋根構成の違いが捉えられる。沼垂町の屋根形状を通り別に分類したものがfig. 6である。現存する町家の数が少ないので、正確な通り別の分析にはならないが、以下ではその概要を示す。

「本町」は古くからある商店街で古い家並みが残っている通りである。平入り屋根と寄棟屋根のせがい造りが合計で80%を占める地域である。寄棟の多くは角地に位置している。

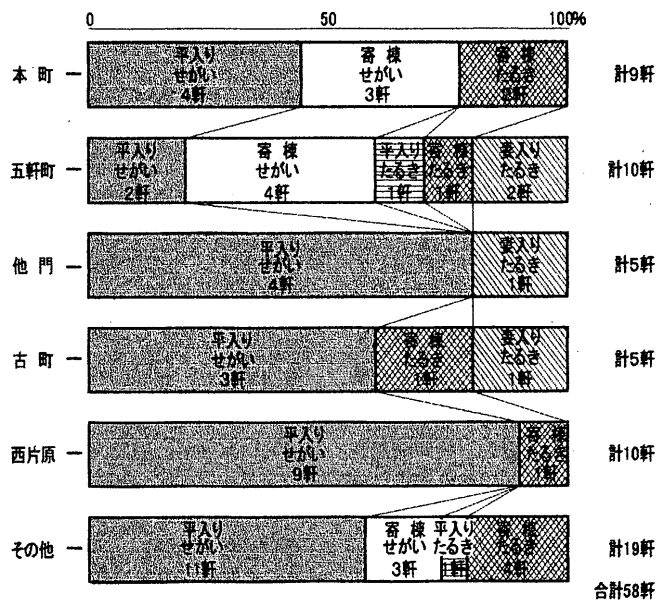


fig. 6 沼垂町の屋根形状・通り毎の比較

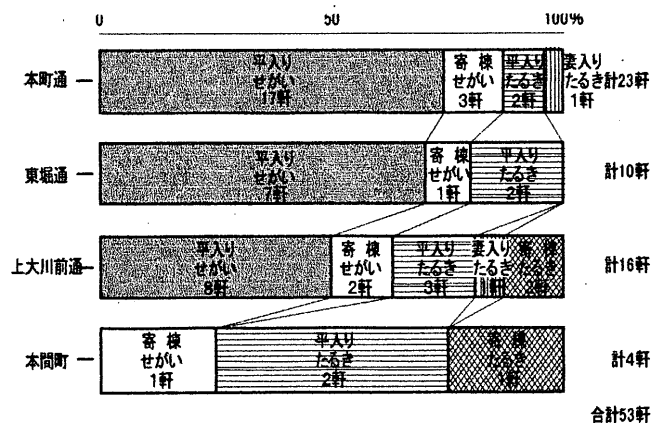


fig. 7 新潟町の屋根形状・通り毎の比較

(※通り名は、俗称として使われているものも含む。)

「五軒町」は本町より西側（栗ノ木バイパス側）の通りである。屋根形式は、平入り、寄棟、妻入り屋根が混在している。この通りは、商店が少なくせがい造りも60%と他の通りに比べて低い、たる木造りの町家も見られる。

「他門」は旧栗ノ木川に面した通りで間口の広い平入り屋根のせがい造りが多い。

明治初期から大正時代の古い町家のせがい造りがまだ残っている新潟町の屋根構成を、通り別に分類したものがfig. 7である。「本町通」の12、13番町はさまざまな小売業者の店舗が多い通りである。また、五葉堀（五番堀）の南側に位置する10、11番町は問屋・卸しの店が集まる通りである。現存する23軒の古い町家のうち、平入り屋根・寄棟屋根のせがい造りが合わせて20軒と大多数を占めていることが特徴である。

「東堀通」は、かつて道路の中央に掘割を持っていた通りである。堀の東側は本町通りの町家の裏庭、蔵に接し、西側に町家の正面が面していた。現存するせがい造りも10軒ほどで、その内7軒が平入り屋根のせがい造りである。

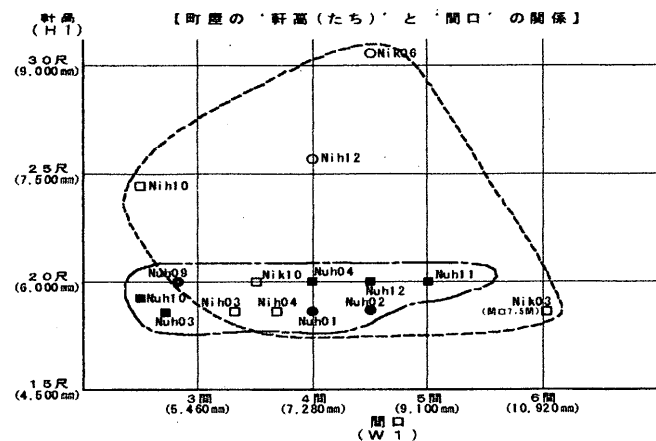


fig. 8 町家の軒高（たち）と間口の関係

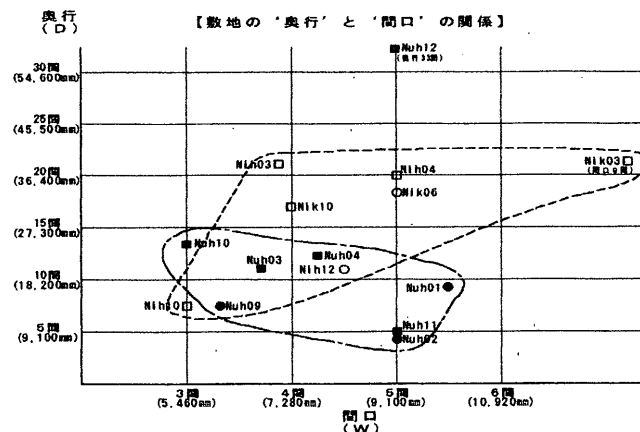
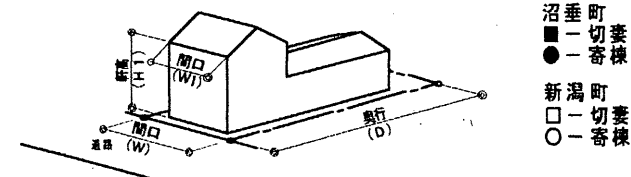


fig. 9 敷地における奥行きと間口の関係

3-3 町家のたち(軒高)と間口の関係、奥行の分布

沼垂町のたち(軒高)は18尺(約5.4m)ないし20尺(約6.0m)に統一されて建てられている。1,2階の天井高も2.4m~2.5m程である。これは、現在建てられている新しい住宅とほぼ同じ軒高・天井高である。建物の間口は2.5間から5間程度で広い巾を持っている(fig.8)。一方、新潟町の建物の間口も沼垂町と同じ領域に分布している。ところが、たち(軒高)は、18尺(約5.4m)から32尺(約9.6m)まで大きな幅を持ち、24尺以上の町家が3軒も確認された。そのうちの1軒は、実際に中2階を持つ特徴的な空間構成になっている。

さらに、同じ沼垂町でも栗の木パイパス(旧栗の木川)を挟んで本町通り、五軒町のたち(軒高)より古町・西片原のたち(軒高)は低くおさえて建てられている。また、新潟町における本町通、上大川前通の12,13番町と10,11番町では五菜堀を挟んで12,13番地の方がたち(軒高)が高く、10,11番町は低い。新潟町は五菜堀に対して、沼垂町は栗の木川に対して、たち(軒高)が北東に高く南西に低いという類似した構造を持っていることが分かる。また、沼垂町と新潟町で敷地の間口を比較してみると、ほぼ3~5間前後に集中している。奥行に関しては、新潟町では7~22間、沼垂町では5~14間と大きく違っている(fig.9)。

4. せがい造り・部材寸法の比較

まず、せがい造り・部材寸法の記号はfig.10に示す。

4-1) 沼垂町・新潟町でのせがい梁の特徴

一般的な新潟市・近郊のせがい造りは、梁間(スパン)方向に $\textcircled{1820}$ (単位:mm)で小屋梁を入れて屋根を支える構造である。軒先を長く出す時や、軒先に荷重のかかる雪対策として、せがい造りが使われている。新潟町のせがい梁間隔は、 $\textcircled{1820}$ と $\textcircled{910}$ とがある。沼垂町町家のせがい梁間隔は、 $\textcircled{1820}$ の中間に一本せがい梁を入れた $\textcircled{910}$ になっている。このせがい梁は、fig.11のように一間の長さしかもたず、 $\textcircled{1820}$ 間隔で入ったせがい梁が反対側に通っているのと異なっている。これは飾り梁としての使われ方であり、新潟市・近郊では化粧梁と呼ばれている。その結果、道路側にはせがい梁が見え、反対側はこのせがい梁が地桁のところで収められ、桁梁が出る構法になっていない。沼垂町では、

表にこの化粧梁を使ったせがい造りの多いことが特徴である(fig.12)。

一方新潟町は、二つの組み合わせが混在している。一つは、沼垂町と同じせがい梁 $\textcircled{910}$ (3尺)とたる木 $\textcircled{227.5}$ 、 $\textcircled{303}$ の組み合わせである。沼垂町より広い $\textcircled{303}$ 以上のたる木が用いられている。もう一つは、 $\textcircled{1820}$ のせがい梁間隔に $\textcircled{360}$ と $\textcircled{455}$ のたる木が用いられている。 $\textcircled{910}$ と $\textcircled{1820}$ の二つの混在したせがい梁が見られ、それに加えてたる木間隔の大きいことが特徴である(fig.13)。

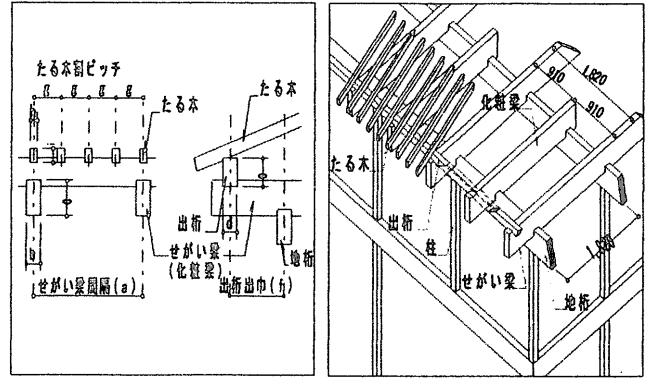


fig.10 せがい造りのディテール fig.11 化粧梁とせがい梁

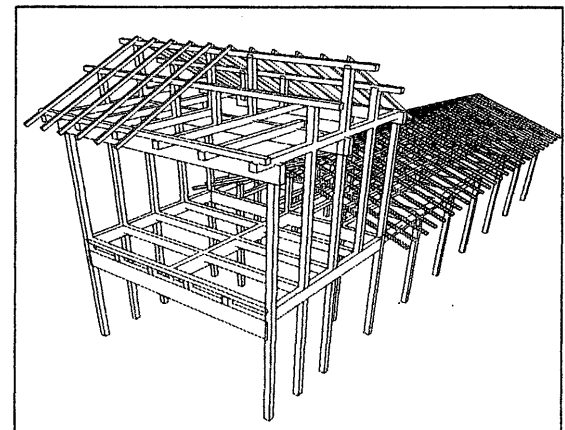


fig.12 せがい造りの町家の骨組み

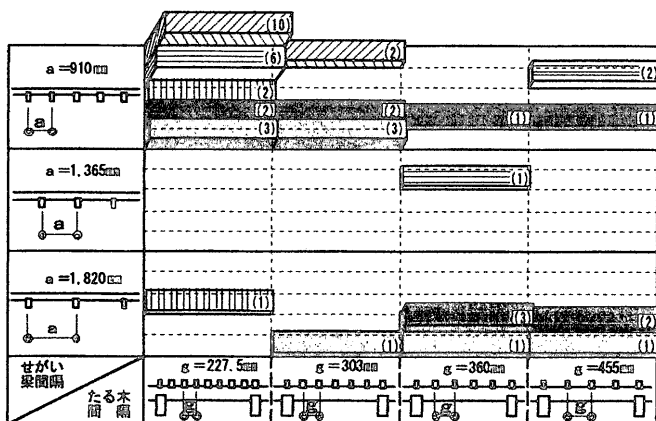


fig.13 せがい梁とたる木の間隔

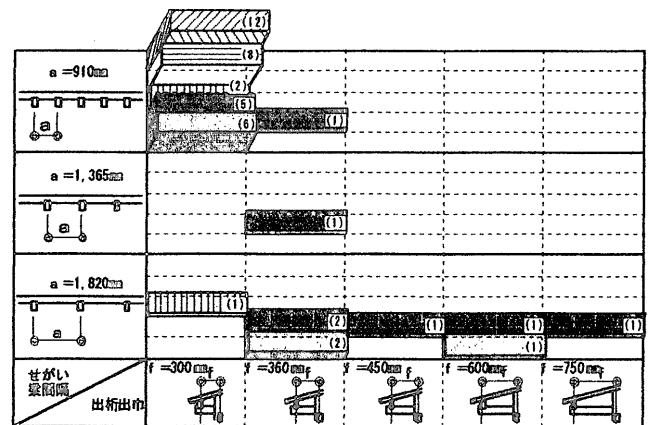


fig.14 せがい梁と出桁の間隔

4-2) せがい梁間隔とたる木の間隔

このようなせがい梁については、その間隔とたる木の間隔とに、沼垂町と新潟町の特徴が見られる。

沼垂町@910(3尺)のせがい梁は、せがい梁と化粧梁とで構成されている。たる木の間隔はそれを4分割した@227.5(3尺/4)が大多数を占めている。この組み合わせが沼垂町のせがい造りで一般的である。

せがい梁の関係を示すものに、せがい梁とたる木の間隔とともにせがい梁の出巾がある。この出巾は屋根の軒の出を決定する大きな基準寸法である(fig. 14)。つまり出巾の長いせがい梁を持っている町家は軒が深く、奥行のある表情をもつ。沼垂町を見てみると、せがい梁@910(3尺)に対して、全ての町家が300mm出巾の組合せで占められている。それに対して新潟町は、二つの出巾とせがい梁の組合せが存在する。ひとつは、@910(3尺)のせがい梁に対して、沼垂町と同じく300mm出巾の場合と、@1820(6尺)に対して、360mmから750mmまで出巾が長くなっている組合せの二つが混在している。

4-3) せがい造り・部材寸法の比較のまとめ

以上のように、沼垂町のせがい造りは、単一のせがい梁とたる木間隔の組み合わせでつくられている。新潟町は、ふたつの寸法体系が内在され、沼垂町より広い間隔で構成されている。しかし、たる木部材の寸法は、沼垂町の方が小さく36mm×45mm、45mm×60mmが過半を占め、新潟町ではそれより大きい、45mm×60mmや60mm×75mmが多い。これらの違いが景観の印象に大きな影響を与えていると考える。つまり、沼垂町では部材は小さいが、せがい梁とたる木間隔が狭く、新潟町では部材は大きい、その間隔が広いために全体として繊細な印象を与えていると考えられる(fig. 15, 16)。

5. 町家の空間構成

5-1) 町家の室構成

沼垂町の町家の室構成は表から「ミセ」、その奥に「イタノマ」、「チャノマ」、「ネマ」が並び、「ネマ」の前に「ブツマ」を置く例もある。二階は表二階に「ザシキ」や「キヤクマ」を持ち、「ネマ」が続く(fig. 17)。

新潟町は、表から「ミセ」、「ザシキ」、「チャノマ」または「ミセ」、「チャノマ」、「ザシキ」、または「ネマ」の順に配置されている。二階の表二階は主に「ネマ」が位置している(fig. 18)。

5-2) 町家の住まい方

沼垂町の町家は、「ミセ」に接客を行うことのできる量ないし、板張りの3畳程の帳場を持っている。これに対し新潟町の町家では、接客行為を「ミセ」または「チャノマ」で行っていた。儀礼及び客間の使われ方にも相違が見られる。沼垂では「オモテニカイ」は座敷ないし客間としての機能を持ち、儀礼、もてなしの場として使われる空間で、格式あるしつらえがされていた。これに対して、新潟町では「チャノマ」及び「ザシキ」が儀礼及び客間の空間として機能しており二階(オモテニカイ)は「ネマ」として利用されていた。

6. 沼垂町と新潟町の町家の特徴

6-1) 囲炉裏

沼垂町と新潟町ではどちらも「囲炉裏」を持っていた。冬の暖房用としてばかりではなく、お湯を沸かす等常に日常生活で使われていた。沼垂町では「チャノマ」ないし「ネマ」に設けられており、その大きさは910(mm)×910(mm)(畳半間)程であった。新潟町は、

「チャノマ」ないし「キヤクマ」に置かれ、大きさは455×455(1尺5寸)ないし600×600(2尺)が中心で沼垂町より小さい。(fig. 19)この「囲炉裏」の大きさの違いは、沼垂町と新潟町の特徴のひとつである。

沼垂町における囲炉裏は、それを中心として、家族の団欒という行為の目的として使われていた。一方新潟町の囲炉裏は、家族の

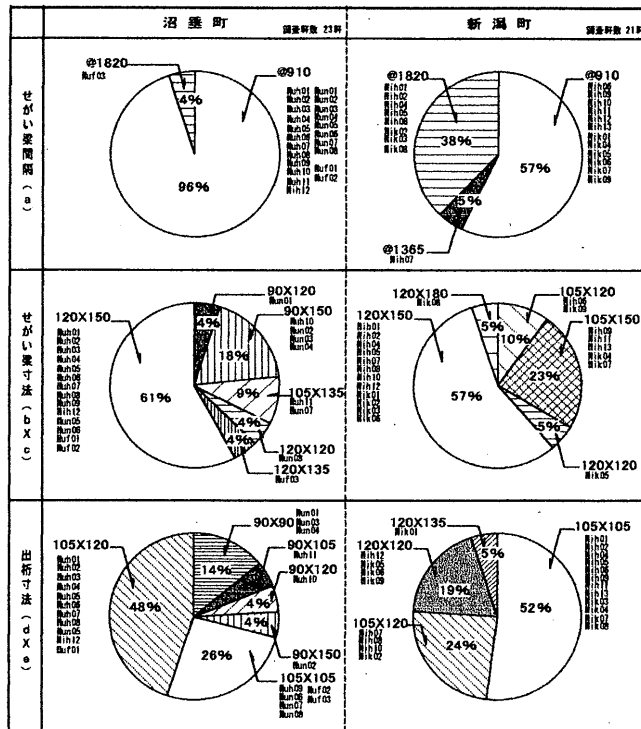


fig. 15 せがいの各部材寸法の比較①

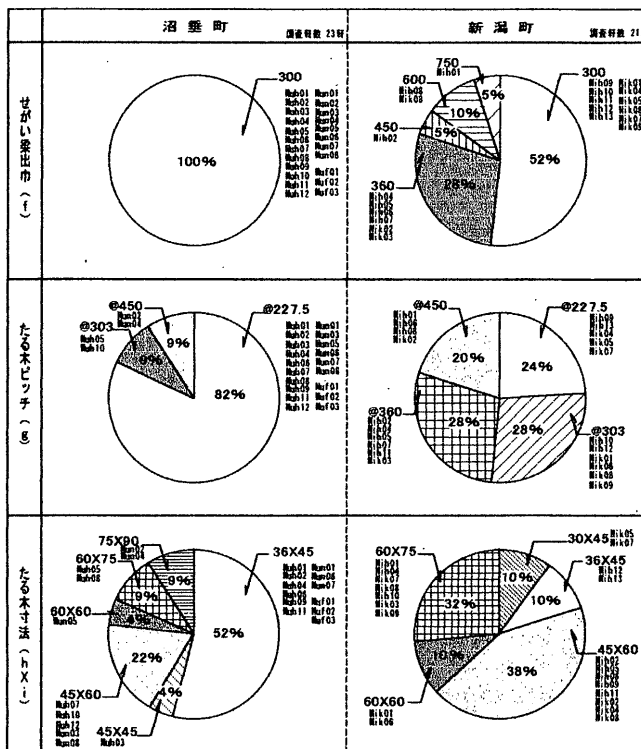


fig. 16 せがいの各部材寸法の比較②

の他接客の場としての機能を持ち、そのため沼垂町の囲炉裏よりも小さくしつらえたと考えられる。沼垂町の大きな「囲炉裏」は、せがいで見られたがっしりとした造られ方に、共通した特徴を持っていると考えられる (fig. 19, 20)。

6-2 「オモテニカイ」の廊下

沼垂町では、「オモテニカイ」の廊下を持つ町家が多く見られる。この廊下は道路に面しており、採光の機能を持っており縁側に類似している。この「オモテニカイ」の廊下は、「ミセ」の付近より二階へ上られるよう階段があり、この「オモテニカイ」の廊下を通過して、儀礼や客間として「ザシキ」や「キヤクマ」に入ることができる (fig. 17, 19)。このように沼垂町の町家は、化粧梁@910の軒先を持つ沼垂町のせがいで造りは格の高い室を表に持ち、道路からの見えを大切にしたい、沼垂町のせがいで造りの特徴を示していると考えられる。

一方新潟町では「オモテニカイ」の廊下を持った家は少なく、オモテニカイの使用は「ネマ」としての利用が中心で、二階を生活の場として使っている点が大きく異なっている (fig. 18, 19)。

6-3 土間と蔵

新潟町では、敷地内後方に「蔵」や「倉庫」を持ち、「ミセ」と「蔵」を結ぶ動線として「ドマ」が機能していた。さらに、その土間を通り接客や儀礼として「チャノマ」に接続していた。沼垂町の「オモテニカイ」に化粧梁として格式を持たせるせがいで造りの特徴的な構法は新潟町には見られていない。また、沼垂町は「蔵」を敷地内に持たず、離れた場所に倉庫を持っていたことがヒアリングにより明らかになった (fig. 19)。

6-4 中庭

新潟町では、ほとんどの町家が中庭を持っていた。通風や採光の他、鑑賞用として位置づけられていた。この中庭に面して、「チャノマ」、「ザシキ」を配していた。一方、沼垂町はほとんどが中庭を持たない。敷地の奥に二軒のみ庭を持っている町家はあるが、中庭はない。ところが、「チャノマ」「ザシキ」は沼垂町は「オモテニカイ」に位置づけられており、この中庭の働きのかわりを「オモテニカイ」の廊下を取るることによってその機能を持たせていたと考えられる (fig. 19)。

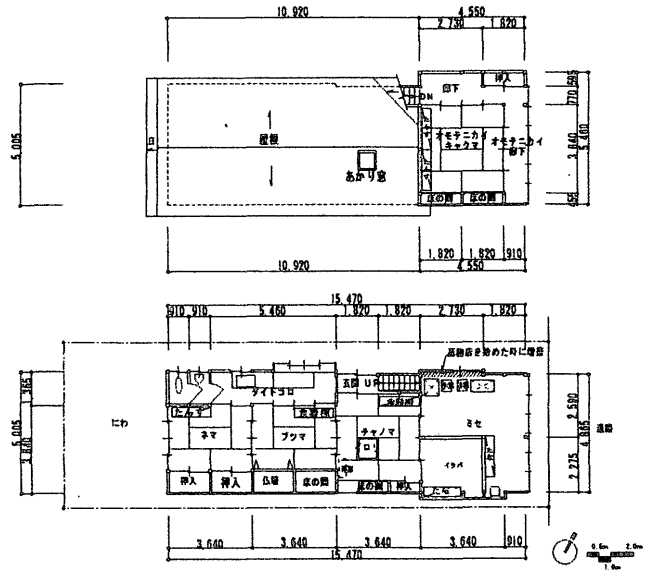


fig. 17 沼垂町の町家 (昭和2年)

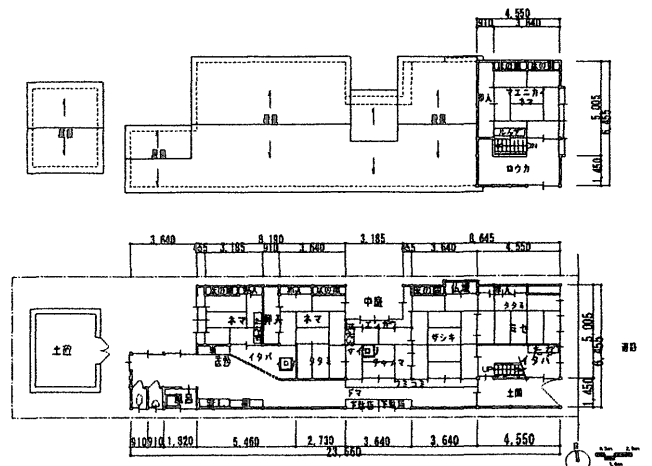


fig. 18 新潟町の町家 (明治19年)

| | 記号 | ミセ | チャノマ | オモテニカイ | キヤクマ | イハバ | イハバ | イハバ | イハバ | イハバ | |
|-------|-------|-------|------|--------|------|-----|-----|-----|-----|-----|---|
| 沼垂町 | Nuh01 | ● | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | |
| | Nuh02 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ | |
| | Nuh03 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ | |
| | Nuh04 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ | |
| | Nuh09 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ | |
| | Nuh10 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ | |
| | Nuh11 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ | |
| | Nuh12 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ | |
| | 新潟町 | Nik06 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ |
| | | Nih04 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ |
| | | Nih03 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ |
| | | Nik03 | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ |
| Nih12 | | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ | |
| Nik10 | | ● | ○ | △ | ○ | | | | | ○ | |

凡例 ○倉庫 □もてなし ●儀礼 △園藝
◇就寝 ●商売 ●接客

fig. 20 沼垂町と新潟町の町家の室機能

| | 記号 | 奥二階廊下 | 土間廊下 | いろり | 穴蔵 | 中庭 | 蔵 | 仏壇 | |
|-------|-------|-------|------|--------------------------|-------------------|-----------|----|--------|-----|
| 沼垂町 | Nuh01 | X | X | ネマ 910□ | ○ | X | X | X | |
| | Nuh02 | ○ | X | チャノマ 910□ | ダイドコロ ロウカ | X | X | プツマ | |
| | Nuh03 | ○ | X | チャノマ 910□ | ○ | X 奥にニワ | X | プツマ | |
| | Nuh04 | ○ | ○ | チャノマ 910□ 一部 | ダイドコロ | X 奥にニワ | X | ネマ | |
| | Nuh09 | ○ | X | チャノマ 910□ ネマ 455□ | ダイドコロ ロウカ | X | X | X | |
| | Nuh10 | X | ○ | X | X | X | ○ | チャノマ | |
| | Nuh11 | ○ | X | イマ 910□ (チャノマ) | ダイドコロ | X | X | イハバ(付) | |
| | Nuh12 | X | ○ | チャノマ 910□ | ダイドコロ | ○ | ○ | ザシキ | |
| | 新潟町 | Nik06 | ○ | ○ | キヤクマ 455□ (2階) | ロウカ | ○ | 倉庫 | ザシキ |
| | | Nih04 | X | ○ | X | ○ | ○ | ○ | ザシキ |
| | | Nih03 | X | ○ | チャノマ 455□ (徳敷) | X | ○ | ○ | X |
| | | Nik03 | X | ○ | チャノマ 600□ | ダイドコロ | ○ | 倉庫 | X |
| Nih12 | | ○ | X | チャノマ 910□ ネマイタノマ 455□ | X | X | 倉庫 | チャノマ | |
| Nik10 | | X | ○ | チャノマ 600□ イタノマ 600□ | X | ○ | ○ | ザシキ | |

fig. 19 沼垂町と新潟町の町家の特徴

6-5) 仏壇

仏壇は、新潟町では中庭に面して「ザシキ」と「チャノマ」に置かれている。「ザシキ」は儀礼の他、就寝、もてなしの使われ方をしている。「チャノマ」は接客、団欒が中心であるが、仏壇が据えられている。

一方、沼垂町は「ブツマ」、「ネマ」、「チャノマ」、「イマ」、「ザシキ」と仏壇の置かれている室が多岐にわたっている。「ブツマ」での室の使われ方を見ると、就寝と儀礼とに使われている。「ネマ」では就寝のほか儀礼として使われ、「チャノマ」、「イマ」では団欒のほか儀礼として使われている。

新潟町では、格のある「ザシキ」に仏壇が置かれ、儀礼が室の使われ方として位置づけられている。沼垂町では仏壇の置かれている室が格上の室ばかりではなく、「オモテニカイ」の室に儀礼やもてなしといった使われ方の室が位置づけられている。

6-6) 「オモテニカイ」の室の格式

新潟町では「ミセ」、「ザシキ」、「チャノマ」、「ネマ」の配列が「ミセ」の隣室に格上の室として「ザシキ」が位置している。一方新潟町では「ミセ」、「チャノマ」、「ブツマ」、「ネマ」が並ぶ。「ミセ」の隣には家族の団欒として使われている「チャノマ」が位置づけられている。これは敷地の奥行に関係があると思われる。沼垂町では、敷地の奥行が新潟町より短いため、格上の「ザシキ」は二階へ上げられたと考えられる。

この接客や儀礼といった格式を持たせる室は新潟町では中庭に面して配され、沼垂町は「オモテニカイ」と「オモテニカイ」の廊下に位置づけられているのである。光や通風を室の中に取り入れる工夫が、「オモテニカイ」の廊下からなされたのである。また、「オモテニカイ」の廊下に、化粧梁として格式を持たせるせがい造りの特徴的な構法を見ることができ、この構法は新潟町には見られない構法である。

7. 阿賀野川流域の町家の類似性

沼垂町と新潟町におけるせがい造りの違いを、その寸法・構法に注目して捉えたが、阿賀野川流域に位置しているせがい造りを調べると、その構法にこれらの2つの町と共通した特徴を見ることができ、

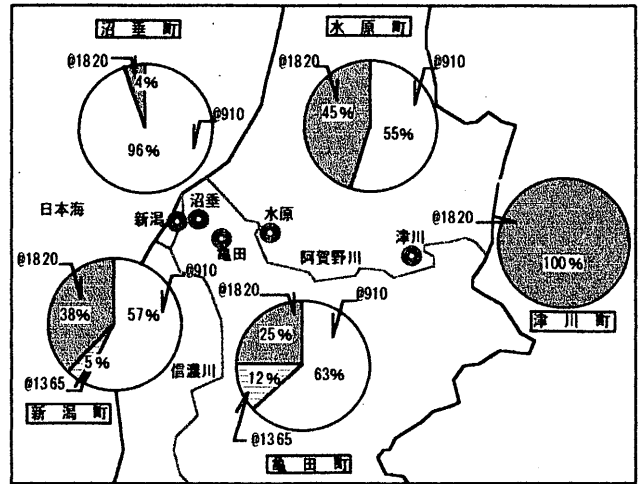


fig. 21 阿賀野川流域の町家のせがい梁間隔

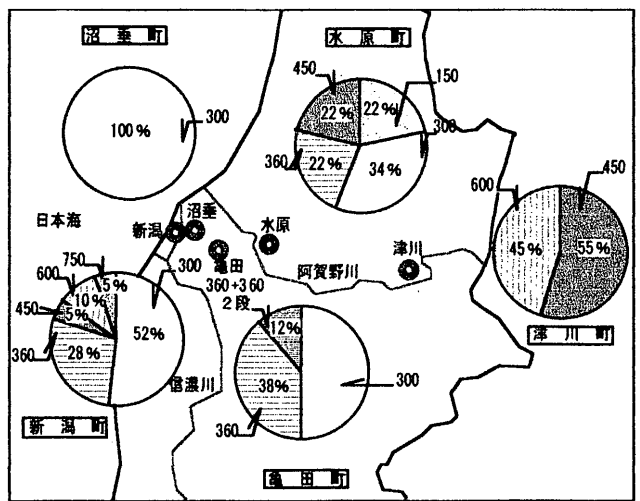


fig. 22 阿賀野川流域の町家の家のせがい梁出巾

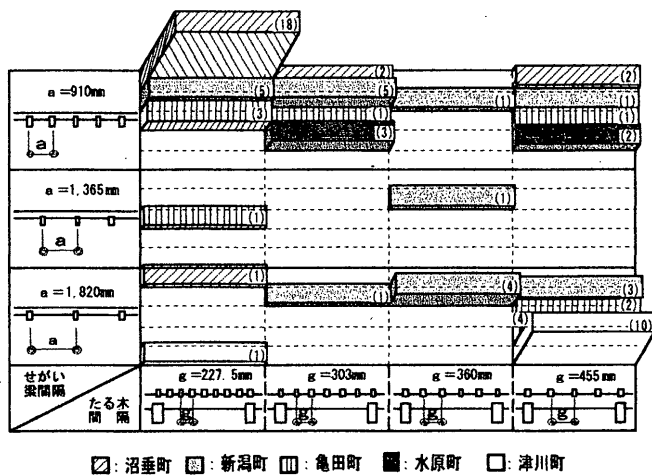


fig. 23 せがい造りの系譜その1

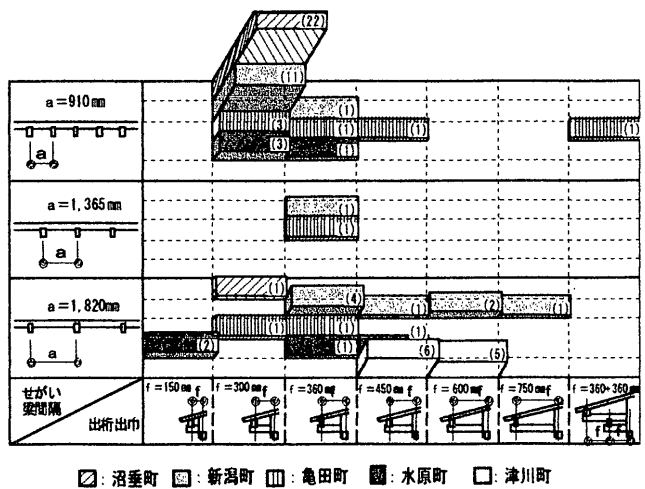


fig. 24 せがい造りの系譜その2

7-1) 阿賀野川流域の町家のせがい造りの分布

せがい造りは、阿賀野川流域の亀田町、水原町、津川町の町家にも見ることができる。亀田町はせがい造り・たる木造りの平入り屋根が多く見られるが、妻入りや、寄棟屋根も現存する。水原町は火災により古い建物が全体的に少ないが、せがい造りは全て平入り屋根である。津川町は平入り屋根と切り妻屋根が混在して町を形成している。

7-2) 阿賀野川流域の町家におけるせがい造りの地域的相違

7-2-1) せがい梁間隔とたる木の間隔

阿賀野川流域のせがい梁間隔を調べてみると fig. 21 になる。上流の津川町のせがい梁間隔は全て @ 1820 である。水原町、亀田町と下流に行くほど @ 1820 のものは次第に減っていく。河口にある沼垂町は、@ 1820 はほとんどなく、@ 910 となる。一方、信濃川流域にある新潟町は、津川町と沼垂町の間に位置している亀田町、水原町の間隔に類似してしていることが特徴である。たる木の間隔を見てみると、津川町は @ 455 が多く、水原町は @ 455 と @ 303、亀田町は @ 455 と @ 227. 5 と下流に行く程少しずつ間隔が狭くなっていく。沼垂町はその内で最も狭い @ 227. 5 が大半を占めている。新潟町は、沼垂町と津川町の特徴を合わせ持ったたる木間隔となっている。つまり、せがい梁とたる木間隔の二つを合わせて見ていくと、fig. 23 のように分布が徐々に変化していること

7-2-2) せがい梁の出巾

沼垂町のせがい梁の出巾を、出桁と地桁の間隔で計ると寸法は、@ 910 に対して全て 300mm となっている。上流の津川町では 450mm と 600mm と出巾が長くなっている。また、せがい梁の間隔は @ 1820 である。新潟町の出巾は、せがい梁・たる木間隔と同様に津川町と沼垂町の両者の特色をあわせ持っている。このように、沼垂町・新潟町の町家のせがい造りは、上流の津川町、水原町、亀田町と次第的に変化していることがわかる。(fig. 22, 24) つまり、沼垂町、亀田町、水原町、津川町と阿賀野川流域に位置する町家はせがい梁の出巾が上流に行くほどだんだん長くなっていく。信濃川流域に位置する新潟町は出巾が混在しており阿賀野川流域と異

8. まとめ

沼垂町と新潟町の町家のせがい造りという構法は、その寸法体系や立面の構成・使われ方に多岐の違いがあることが分かった。それらの町家のつくる景観も異なる。さらに、信濃川・阿賀野川流域の津川町・水原町・亀田町のせがい造りの構法の違いが徐々に変化していることも明らかになった。このようなせがい造りの構法分布は、歴史的な視点からの技術伝播を捉えることも必要であり、次報の問題であると考えている。

沼垂町は蒲原地方の「農」の影響を、新潟町は湊によって栄えた繊細な「商」の影響を受けながら、せがい造りという形でその風土性を形成していったとも考えられ、今後蒲原地方の農村住宅との比較分析を進めていくことが、必要であると思われる。

[謝辞]

調査にご協力下さった、沼垂町・新潟町の皆様、ならびに阿賀野川流域の亀田町、水原町、津川町の皆様に心より感謝致します。

注

- 注1) せがい(船柁)とは、和船の巾両側に迫り出した船べりの意味がその語源である。つまり片持梁で屋根を支える建築構法が、その船べりの構法によく似ているところからそう呼ばれたのである。新潟には軒先の雪対策のひとつとして分布していったと考えられる。新潟では「せいがい」、「せんがい」、「すいがい」とも呼ばれている。
- 注2) 沼垂町のぬったり(沼垂)という名は、647年に書かれた、日本書紀の中で淳足(ぬったり)と表記されたのが始まりである。現在の沼垂は、1684年からこの場所に位置している。新潟市沼垂地域を示している。一方、新潟町は1655年現在の場所に移転し、町の歴史が始まった。新潟島の中にある東堀通、本町通、上大川前通等を中心とした地域を示す。
- 注3) 住戸と住戸の間のできる隙間をそれぞれが利用することを、高田では「ヒアワイ」、白根では「ダシアイ」、栃尾では「クイアワセ」と呼んでいる。
- 注4) 新潟大火：昭和30年に新潟市古町を中心に大火があった。
- 注5) 各町の成立年代は、亀田町：1693年、水原町：1764年、津川町：1610年である。
- 注6) 一般的な1820間隔であることは、地域の異なる大工棟梁4名のヒアリング調査による。

参考文献

- 1) 島村昇、鈴鹿幸雄他：京の町家、鹿島出版会、1971年
- 2) 島村昇：金沢の町家、鹿島出版会、1983年
- 3) 西村伸也、廣江真治、千々石佳弘：新潟の町家における空間構成の特徴とそのしくみ-高田・白根・栃尾の「ヒアワイ」「ダシアイ」「クイアワセ」の使われ方と共用のしくみ-、日本建築学会計画系論文第467号、p71~79、1995年1月
- 4) 西村伸也、千々石佳弘、樋口恭子、森下臨：新潟の町家における集住のしくみ-土間の空間構成と使われ方について-、日本建築学会北陸支部研究報告集、pp309~312、1995年
- 5) 野島宏司、西村伸也、樋口恭子、森下臨：新潟の町家における住まい方と空間構成 その2、日本建築学会北陸支部報告集、pp322~325、1996年
- 6) 玉置伸悟一他8名：富山県における広間型住宅の分布及び広間I型住宅について-富山県の農家住宅に関する研究(1)、日本建築学会北陸支部研究演梗概集、pp289~292、1985年
- 7) 玉置伸悟一他8名：富山県における広間II型住宅とその発展過程について-富山県の農家住宅に関する研究(2)、日本建築学会北陸支部研究演梗概集、pp293~296、1985年
- 8) 沼垂定住三百年祭実行委員会：ぬったり、文久堂、1983年
- 9) 新潟市：新潟湊の繁栄、文久堂、1983年
- 10) 新潟市：新潟市史通史編1、新潟市史印刷共同企業体、1995年
- 11) 新潟市教育委員会：新潟市の歴史的建造物、博達堂、1998年
- 12) 丸山昌夫：ふるさとの百年 五泉・中蒲原郡・東蒲原郡・新潟日報事業社、1981年
- 13) 氏家武：雁木通りの地理学的研究、古今書院、1998年
- 14) 小倉強：東北の民家、相模書房、1954年
- 15) 西会津町：西会津町史第6巻(上)、1991年
- 16) 小原二郎：木の文化、鹿島出版会、1980年
- 17) 吉田靖：日本の民家、学習研究社、1980年
- 18) 藤島亥治郎、藤島幸彦：町家歴訪、学芸出版社、1993年

(2001年4月10日原稿受理、2001年9月7日採用決定)